

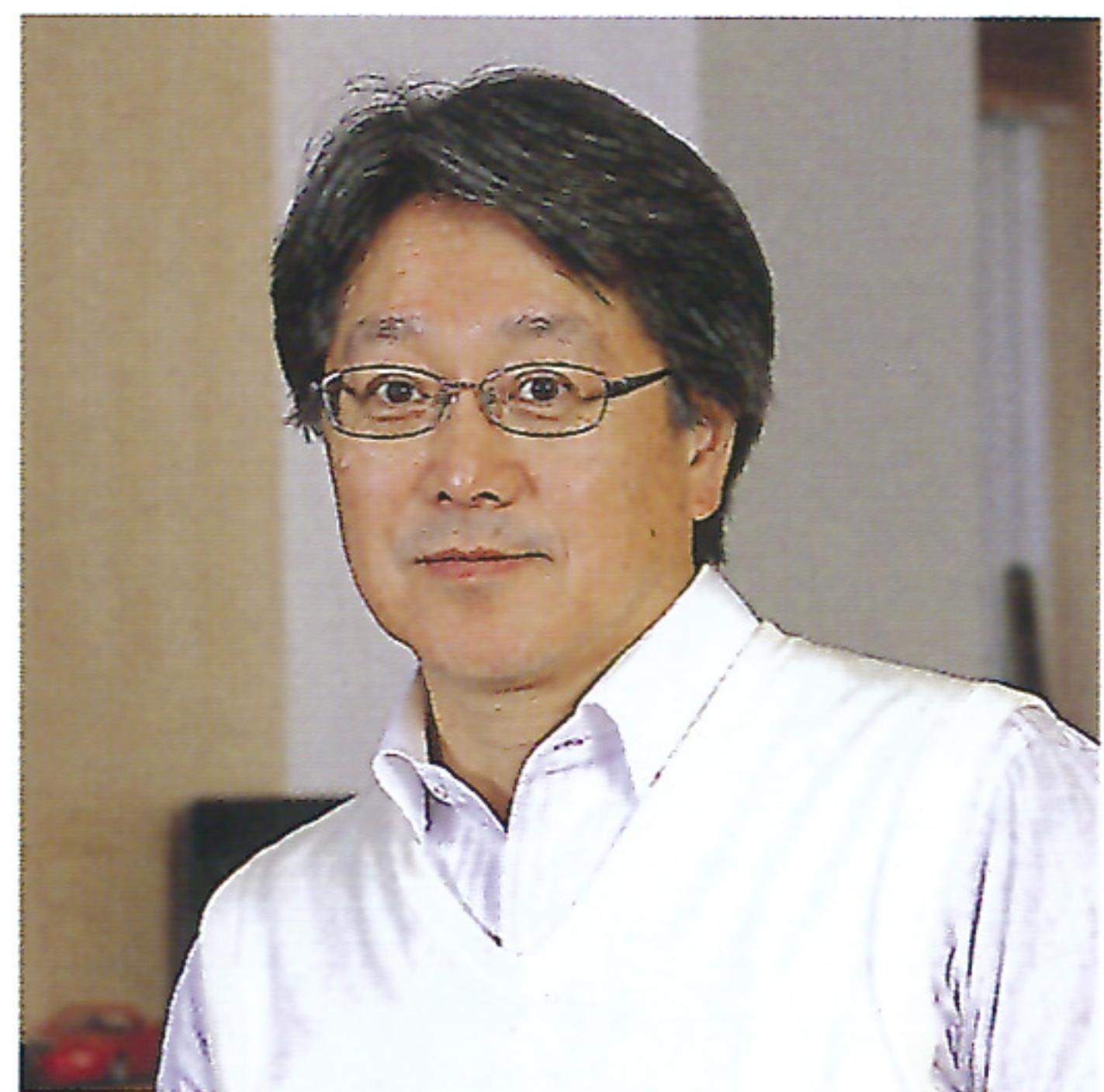
Listening Room



HiFi追求リスニングルームの夢 No.539

オーディオとギターのための
半地下28畳リスニングルーム

川崎市麻生区 中北英紀 NAKAKITA Hideki



薬局を経営するかたわら、オーディオ調整に余念のない中北氏。ギターのコレクションにも多くの時間を費やす



2009年秋に自宅を新築し、オーディオとギターのために30畳以上の空間を準備した中北氏は、これまで愛用してきた大量のオーディオ機器と、14年前に他界したお父様の遺品であるオーディオ機器もリスニングルームに招き入れた。アコースティックギターの響きの美しさをも追求した空間に、合計4系統のオーディオシステムを設置し、音楽ジャンルで使い分ける羨ましい環境を整えている。 (MJ編集部)

私と音楽とオーディオ

和歌山の有田という田舎で生まれた私は、3、4歳の頃から電蓄で鳴らされる新世界や行進曲をバックに、白馬童子のいでたちで庭を闊歩していました。14年前に亡くなった、音楽教師で大のオーディオファンであった父親の影響で、さまざまな楽曲に触れ合って、就学前よりピアノを父から数年教わっていましたが、大嫌いなバイエルは小学生で放棄し、高校生になるまでピアノの復活はありませんでした。

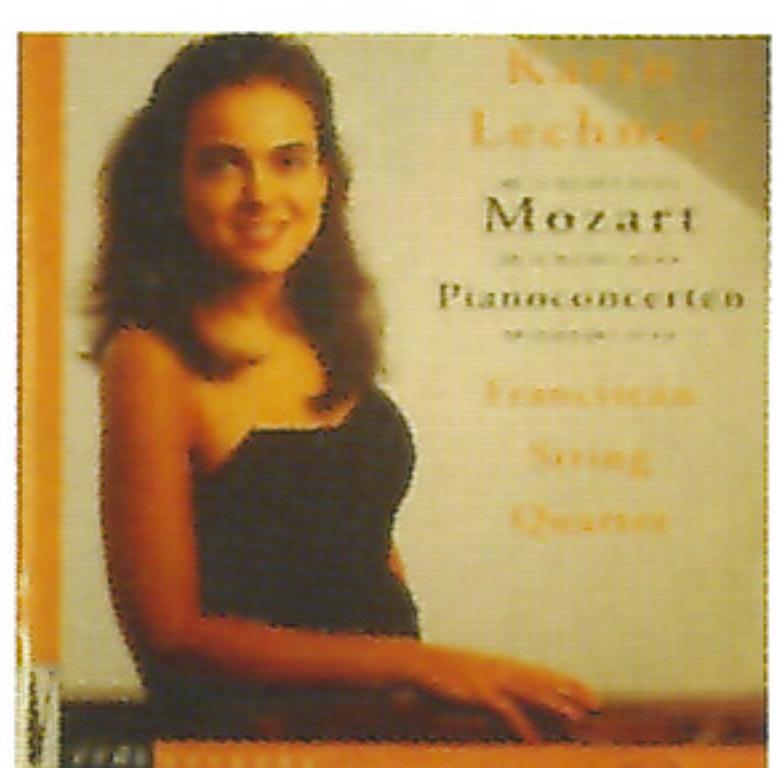
1969年、中学生になり、一家でヤマハのピアノC7購入のため浜松まで行きましたが、私の興味はヤマハの高級フォークギターでした。のちに親にねだってクラシックギター入手し、ギターの基本はクラシックと子供ながらに考え、教則本は綺麗なお姉さまだった小原聖子先生のものを購入し、日々練習していました。同時期にトロンボーンも始め大学生まで演っていましたが、世の中のフォークブームで姉からフォークギターを買ってもらい、その趣味は現在に至っています。

父親のオーディオはさまざまな名機を入手しながら推移しましたが、そのほとんどは今回我が家に転居させました。私は1992年から始めたビンテージギターのコレクションが幸いし、多くの音楽人と触れ合うことができ、本当に幸せな出会いを感じています。とりわけ元オフコースの清水仁さんとの出会いは「きんきあんくるず」なるユニットで数々のライブをこなすに至り、今年は京都、鹿児島、横浜でも演りましたが、あこがれていたスーパースターと同じステージに立てるることは最高に幸せであります。

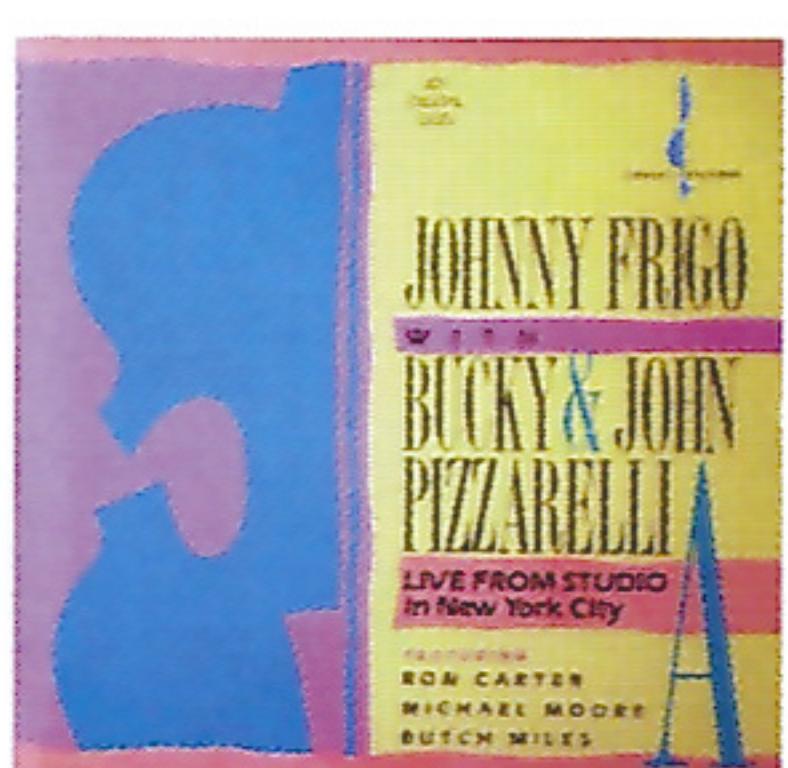
詳細は私のHP (<http://www.nakakitahideki.com/>) をご参照願いますが、清水和音、小原聖子、カリン・レヒナー、小島恵理、大野真澄、松尾一彦、



TADシステムとタンノイ・オートグラフ用のソース機器とアンプ群。TADはマッキントッシュのプリアンプ、タンノイはウエスギのプリアンプを使用。中央下の300Bパラッシュプルはタンノイ駆動用



カリン・レビナー本人から手渡されたCD



音質チェックに使用するチェスキーのCD

大間ジローなどなど（敬称略），多くの方たちと巡り会えました。小原先生とは意外にも私の運営する薬局をご利用くださり，教則本を買って以来30年目に出会いました。また，紛失していたカリン・レビナーのCDを，Eメールでコンタクトをしてコンサート会場で本人から手渡され，大感激したことは宝物のような出来事です。

私のオーディオ観

聴くのはクラシック，演るのはポップスの私ですが，音質については当然ながら，2チャンネルのシステムで，奥行きのある3次元的な音場を再生することを目標にセッティングしています。テクニクスSH8000を発売当初から駆使し，部屋ごと，

スピーカーごとの特性にあった音作りを考えてきました。以前カリン・レビナーのCDを探していましたとMJ誌に依頼したとき，期せずして前田欣一郎さんに測定してもらい，未熟な部分も露呈したということもありましたが，数年前フォニックPAA2を入手して測定がさらに簡単になり，自分の音作りがしやすくなっています。

昨年アキュフェーズDG-48を入手し，マッキントッシュXRT20はこちでイコライジングしています。小さな部屋で満足する音を出すには適度なEQ調整が必要になると 생각ています。

私がスピーカーセッティングするうえでよく使うCDは数々ありますが，筆頭はチェスキー『ライヴ・フロム・スタジオ“A”／ジョニー・フリゴ・ウイズ・バッキー&ジョン・ピツアレリ』です。ワンポイントマイクによる録音で，小編成のジャズ。中央にバイオリンとドラムはさらに奥，フルアコースティックギター2本がスピーカーの外側手前から聴こえ，このCDを後述するレイオーディオでも再生していただきましたが，私のシステム達と同じような音場で聴くことができたので，



清水仁氏（左）とのセッションも行い、最近はアコースティックギターユニット「きんきあんくるず」を結成。気に入ったギターがあれば、清水氏に弾いてもらうこともある。またギターもオーディオも、耳の肥えた清水氏を喰らせることが目標とか

私のセッティングは間違ってなかったのだと安心しました。

現在のスタジオ

半地下構造で $11.424 \times 4.896 \times 2.7\text{m}$ の基礎コンクリートに断熱材、18mmコンパネによる6度の傾斜壁、天井、前後壁に吸音材、天井エアコンなどを設置し、実質的には $10.824 \times 4.28 \times 2.4 \sim 2.5\text{m} = 120\text{m}^3$ の空間を作っています。コンパネの表面には薄くスライスした綺麗な杢のカーリーメイプルを張り付けたので、クロスなどより音の反射だけでなく吸湿にも一役買っています。スピーカーの後ろと天井は常識的な反射壁ではなく、すべて吸音層にしています。これはスピーカー本来の情報を余計な反射で濁らせることなく再生させるためで、異質かもしれません。私はこのほうが好きです。また33.8畳の空間が実質28畳に減っていますが、コンクリートのままでフランジャー効果や残響過多になるのは当然で、洞穴で音楽を聴いている状態になるのでいたしかたないですね。

吸音面はオートグラフの後ろの壁に厚さ10cmの

GW 32kgを張って30cmの空間を設け、10cmのGWで蓋をすると 7.63m^2 、XRT20の後側は窓以外は10cm厚GWで 8.15m^2 、ピアノ後ろも10cm厚GWで 4.14m^2 、スピーカー上部も同様に $5.93\text{m}^2 + 8.07\text{m}^2$ で合計 34.22m^2 の吸音部分となり、全表面積 165.10m^2 のうち20.7%が吸音部分となります。以下、この部材で完全に吸音したという仮定で算定すると、残響時間 $t = 0.162V / -S \log(1 - \text{吸音部比率}) = 1.08\text{秒}$ という数値が出ますが、実際は絨毯やソファーが入り、この半分ほどの感じです。いずれきちんと測定したいのですが。

現在のシステム

2009年9月に当地に転居し、実家の和歌山から13年眠っていた父親の機材をほぼすべて迎え入れ、私のシステムと共存させています。オートグラフ（K3808）はウエスギUBROS1+父親自作の300Bパラップッシュプル（出力45W）で鳴らしていますが、ホールトーンミュージックには最高です。父は亡くなる2年前からオートグラフ用に300Bパッシュプル・モノーラル機3セットを製作して他界しました



TADシステムは2台のマッキントッシュMc2500で2ウェイマルチアンプ駆動。トゥイーターはコンデンサーでローカットしただけ



マッキントッシュXRT20を中心としたシステムではおもにクラシックを楽しんでいる。アキュフェーズのデジタル式イコライザーで伝送特性を調整している



マッキントッシュXRT20駆動用のパワーアンプはマッキントッシュMc1000を使用

が、このパラプッシュップについては最後の作品ですが図面が残っておらず、図面を引く時間を惜しみ、残された時間を使って頭の中の回路図で製作したようです。オートグラフは60Hz以下がもともとほとんど出でていないので、実家の天井に埋め込まれていたフォステクス80cmウーファーを後壁に移設しアキュフェーズM-100にてドライブし、豪華な3Dを構成しています。

TADのTL-1601a×2本+JBL2445J+075はマッキントッシュC32からアキュフェーズF15を介し、500Hzでクロスして2台のマッキントッシュMc2500で駆動しています。やはりホーンドライバー、突き刺さるようにシャープなシンバルやハイハットなどが含まれる音楽には最高です。最初は075なしで聴いていましたが、加えることによって、より自然で伸びやかな高域が合成されます。

レイオーディオと高域ユニットが違いますが、なかなか切れ味の良い音で清水仁さんも納得の音です。以上2種のシステムには古いCDでも絵画的に聴かせるSACD、EMMラボのCDSD+DCC2や、トレンスプレステージを接続しています。

XRT20には25年ほど前、和歌山の実家に来ていただいたことがある縁で父親と数回伺った管野沖彦氏宅で出会って感激し、我が家にも招き入れました。クラシックにもジャズにもオールマイティーに使える名機だと確信しています。現在はマッキントッシュC40とアキュフェーズDG-48を介したうえ、マッキントッシュMc1000×2台でドライブしていますが、以前使っていたMc2600と低域のドライブ能力の違いは明白です。以前は本誌で紹介され絶賛されていたインターナルPEQ、AEF1を使っていましたが、転居を機にDG-48で調整中です。このシステムにはアキュフェーズのDP-800/DC-801と、音の素晴らしいを再認識したデノンDP-100Mを接続しています。

以下は会社の事務室に設置しています。

タンノイ・ヨークは1983年ころ父の友人から譲り受け、すでに27年になろうとしています。これはマランツ#7と、同じ英國出身の熱い音がするマイケルソン&オースチンTVA-1でドライブしています。Mc275よりシャープな力強い音で、#



お父様が製作した真空管アンプ群は和歌山の実家から移設したもの

7との相性は悪くないと感じますし、オートグラフよりはるかにスピード感があり、よりタイトでエネルギーッシュな鳴りっぷりです。

ATC SCM100LPTは、バーチカルツインのJBL K2 S5800を購入するつもりで比較試聴した際、ウォームでファットな中音にすっかりやられて即購入したものです。自宅には置けなかったので会社の事務室で鳴らし、どんな音楽でも熱く聴かせてくれる名機だと思います。これをドライブするのはマッキントッシュC34V+Mc7270で、主にエソテリック P-70VU+D-70VUの力量を遺憾なく発揮させています。

木下正三氏との出会い

先日、清水仁さんとともに箱根のレイオーディオを訪問しました。ご家族全員で温かく迎え入れてくださいり、6時間もの間ご一緒し、木下氏と直にお話しできることに感激しました。木下氏は「芸術オーディオ」を熱く提唱されており、未発表のシステムを含め大小さまざまなスピーカーで音楽を聴きましたが、それぞれの音調が一貫していることに感服し、魂をも伝えうる音を聞くことができました。レイオーディオのスピーカーたちは私が思うに「楽器」であります。そして木下氏は楽器を作るマイスターであり魔法使いであります。お部屋もすばらしく、 $11 \times 7.5 \times 7m$, $570m^3$ という大空間は拙宅の約5倍、こんな空間は都会では無理です。

私が父親の遺品を大切に思い、鳴らすのに苦心していると伝えると「ではあなたの音はどれなの」という厳しい質問には困りましたが、改めて考えると、



仕事場のオーディオシステム。タンノイ、ATCなどのスピーカーシステムをマッキントッシュや真空管アンプで鳴らしている



ヴィンテージギターのコレクションルームは、温度と湿度を管理。5000枚ずつあるLPとCDもこの部屋に保管

私の部屋で扱う音のすべては私の感性に左右されているのですから「これらの機材すべてが私の音」。まだまだ一貫性のない部分もあるうけれど、木下氏の言われる芸術オーディオに手持ちの機材（でもKM1VやTADのTD-4001は絶対入手するだろうな）で近づけることが私の音、オーディオだと考えます。

オーディオの定義なんて我々には趣味のものですから、いろいろなアプローチ、いろいろな鳴らし方、いろいろな音があります。そこがプロのオーディオとの違いかもしれません。レイオーディオの製品をここに迎え入れ、すべてを木下氏にお任せし、音出しするのが一番の近道かもしれません、自分の音ができるまでの経過を楽しむのも趣味のオーディオであろうかと私は思いますから、聴かせていただいた音楽を参考に、私なりに「芸術オーディオ」を追求したいと考えます。